

ふるさとの 其の39 誇り

江原のお浅間さん

江原浅間神社は、1800年ほどの歴史をもつと伝わる歴史のある神社で、古来より大井の郷の総鎮守として、「江原のお浅間さん」と呼ばれ、人々の暮らしの中心にありました。

大井の名前の由来になった御手洗の池

当社は、古来稲作の神として崇敬されてきました。社中にある御手洗の池は、古代より豊富な水が湧き出し、下流の村々の耕地を潤してきました。



現在の御手洗の池

この御手洗の池は、昭和30年代頃から公共水道の取水により水量が激減してしまっただけで、現在も残る御手洗の池は小さいものになってしまいましたが、以前はとても大きいもので「大井」の名前の由来になりました。大井とは、湧水の豊富な場所を意味する地名です。

「大井」は、現在は甲西地区の一部を指す地名ですが、古代は西郡地域の大部分を指しました。大井の名前の由来となったのが、まさにこの御手洗の池なのです。

平成の改修工事

浅間神社の本殿は三間社流れ造り松皮葺屋根、伝統的な神社の建築様式で建てられており、市の文化財にも指定されています。



修復工事の様子

これまで何回か修復工事は行われてきましたが、近年傷みが激しくなったため修理の必要がでてきました。そのため、今回の修理では神社本殿の大床組みの修理と刎高欄・登高欄・宝珠柱の復元、屋根の葺替を行い、3月半ばには完成する予定です。

※1 三十六歌仙藤原公任が選んだ、古来から和歌に優れた36人



江原浅間神社



三十六歌仙図

板絵善色三十六歌仙図(市指定文化財)は、寛永17年(1640)に十日市の歴史や鼻採(はなとり)地蔵の物語を描いた『鼻採地蔵縁起』を十日市場の安養寺に奉納したことが知られています。



今に伝わるふるさとの思い

さて、この浅間神社には三十六歌仙の姿と和歌を描いた板絵が奉納されています。この板絵は、野呂瀬主税助という尾張藩士が寛永17年(1640)奉納したものです。主税助は、元々は現在の若草地区から甲西地区あたりに住んで、武田家に仕えたといわれますが、武田家滅亡後は徳川家の甲府城代平岩親吉に仕え、慶長12年(1607)、親吉が尾張(現在の愛知県)に移るとこれに従って甲斐国を離れたといわれています。

この板絵は、主税助が尾張に移って実36年後、慶安2年(1649)79歳で没した主税助最晩年の奉納ということになります。

三十六歌仙の板絵は、神社などでは間々見かけることが出来ますが、江戸初期に廻

るものは多くなく、また、三十六歌仙の板絵を神社に奉納するという当時の習俗や、なにより遠く尾張の地であって、ふるさとを忘れない主税助の故郷への切ない想いを今に伝えてくれています。

浅間神社は、西郡の中心にあり、古来より人々の信仰を集め大切に守られてきました。地域の歴史を後世に伝えていくため、市は地域と協同で保存修理を行いました。この歴史ある地域の宝をこれからも大切に守っていききたいですね。

※2 他にも主税助は、元和5年(1619)、地藏菩薩を描いた板絵(市指定文化財)、三十六歌仙図と同じ寛永17年(1640)には十日市の歴史や鼻採(はなとり)地蔵の物語を描いた『鼻採地蔵縁起』を十日市場の安養寺に奉納したことが知られています。